

強キャラ近藤くん。

トツプハムハット卿

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

弱キャラ友崎くん の世界に強キャラのオリ主を追加してみました。

青春を感じれるようなストーリーにできたらと思っています。

# 目次

L	L
v.	v.
2	1
6	1



## L v . 1

「はい、じゃあこの二次方程式の軌跡を……近藤、答えてくれ」

数学教師から「近藤」と呼ばれた彼の名は「近藤涼太」。

「——です。」

「正解だ。よく理解しているな、さすがは学年トップだ」

涼太への決まり文句を言い、涼太の隣の席の竹井へと数学教師は目線を移す。

「次の問題を竹井、解いてくれ」

「ええ！俺つすか!?!全然分かんねえや〜！ リョータ、教えて〜！」

問題を見るや否や、隣の涼太に助けを求める竹井。

「こら、考える前から近藤に頼るな」

「考えましたって！2秒くらい……」

「それは“考えた”とは言わん」

「ええ〜」

そんなやり取りを見て、思わずクラスのみんなが笑いをこぼす。

これが、涼太の所属する2年2組の日常的な風景だ。

「いやあ、リョータ！マジありがと！」

「気にすんなって。いつもの事だし」

「そうだな。竹井がリョータに教えてもらうのは、いつもの事すぎてもう見慣れたよ」

水沢が呆れたような表情を浮かべながらも、楽しげにそう言う。

「ちよ、タカヒロそれ言っちゃう!？」

「事実だから仕方ないだろ」

一緒にいた山本までも竹井をいじりはじめる。

「修二まで!？」

気がつけば、竹井と涼太のそばには仲のいいメンバーが集まってきていた。

「竹井が先生に当てられて答えられたとことか、見たことないなあ」

「葵までそんなことを……」

日南葵の言葉に少し大げさにしよんぼりする竹井を見て、またみんなから笑いがおこる。

「でも、あの問題をすぐに解けるなんてさすがリョータ！」

七海みなみ―通称“みみみ”が涼太の肩をバシバシと叩きながら褒める。

「大したことないよ。それより、みみみ痛い」

「あ、ごめんごめん。つい！」

痛いといいながらも、いつものことなので涼太もみみも気にしてはいない。

「お前ら2人のそのやり取り、毎日やってるよな。ほんと仲良しだな」

「まあ、涼太は私の頼れる相棒だからね！涼太と私は一心同体！2人で1人なのです！」

「あー、はいはい」

「照れることないぞ相棒！」

涼太の冷たい対応を照れだと思い、さらにバシバシと涼太の背中を叩くみみみ。

「こらー！みんみ！近藤が困ってるでしょ！」

夏林火花がみみみに向かってそう言いながらバシツと指を差す。

「助けてくれ火花」

「近藤も、嫌な時はバシツと言う！」

助けを求めたはずが、なぜかお叱りを受ける。

「火花はいつも俺に対して厳しいなあ」

「私が厳しいんじゃない！近藤がみんなに甘すぎるの！」

「そんなこと言われてもなあ」

困ったような、それでいて楽しそうな表情を浮かべ、頭をかく涼太。

「みんな、次は移動教室だよ！早く行かないと遅刻しちゃうー！」

ふと時計を見た、泉優鈴が急ぐように促す。

「優鈴、そんなに焦らなくても大丈夫だって」

「涼太の”大丈夫”はあてにならないよ！そう言つて、いつもギリギリに着席するし！」

「あはは、たしかにその通りだね。優鈴の言う通りだよリョータ」

運動神経抜群で学業も成績優秀な涼太だが、時間にルーズな一面があり、遅刻癖があるのが残念なところ…。

☆

「ねえ、涼太。ちよつと今いい？」

「ん？ 葵か。いいけど、どうした？」

午前中の授業も終わり、お昼を食べ終えて竹井たちとお喋りしていた涼太に、日南が声をかける。



「教室じゃ話しにくいような話なんて、珍しいな」

「まあ、ちよつとね」

日南に連れられ向かった先は、旧校舎だった。

日南に続くように、今はもう使われていない教室に入るとそこには……

「よ、よう。近藤」

「よう……って、友崎？」

クラスメイトの友崎がいた。

## Lv. 2

「ここに呼ばれた理由を聞いても？」

涼太がそう言うと、日南は顔の前で申し訳なきように手を合わせた。

「急に呼んでごめん。実は、涼太に協力してほしいことがあって」

日南は続ける。

「いろいろ説明すると長くなるから、単刀直入に言うね。」

友崎くんを人生の勝ち組にするために協力してほしいの！」

さすがに、日南の言っている意味が分からない。

「え？」

日南の言うことを簡単にまとめると、

友崎は人生を「生まれた時点で勝敗の決まっているクソゲー」、日南は反対に人生は「努力で勝ち組になれる神ゲー」だと考えている。

友崎に人生が神ゲーであることを証明するために、友崎が勝ち組になるよう日南がプロデュースする。

その手助けを涼太にして欲しい。  
こんな感じだ。

「——なるほど、そういうことか」

なんとなく、話の概要は掴めた

「それで、何をすればいいのかな？」

「基本的には何もしなくていいの。でも、彼が何か失敗をしたら上手くフォローをしてほしい」

「…お、俺からも頼む」

想像よりも簡単そうな頼みに、涼太は快く承諾する。

「わかった。上手くフォローできるか分からないけど、やってみるよ」

「ほ、ほんとか!? ありがとう近藤!」

「ああ。友崎、これからよろしくね」

「(こ、こちらこそ!」

ぎこちなさそうに笑う。

これは、笑顔の練習もする必要がありそうだ。

次の日、友崎はマスクを付けてきた。

「風邪か？」

「いや、日南の特訓メニューの一環」

「なるほど。頑張れよ」

「お、おう」

友崎はまだ、涼太と話すのも少しぎこちない。

そこへ、

「おい涼太！次移動教室だよ！早く行こ行こ!!!」

教室の入口で、みみみがブンブンと腕を降つて涼太を呼ぶ。

「はいはい。てことで、行くわ。友崎も遅れないように」

「お、おう」

事情を知っている涼太との会話でも、まだ緊張してしまい  
(まだまだ道のりは長いな…)とため息をこぼす友崎だった。

\*\*\*\*\*

「涼太、友崎と仲良かったっけ？」

みみは不思議そうな顔で言う。

「んー、すごく仲良いってわけでもないよ。たまたま好きなゲームが同じで、そこから話すようになった」

「なるほどー！熱い友情ですな!!」

あはは！と笑いながら涼太の背中をバシバシと叩くみみ。

「いや、熱くはないでしょ…」

適当なみみに呆れながら、次の教室へ向かう涼太。

2人のやりとりはいつもこんな感じだ。

帰りのホームルーム。

何やら、担任が紙の束を抱えている。

「この間の模試の結果、返すぞー」

模試。進学校に通う学生は、必ずと言っていいほど定期的に受ける模擬試験。

きつと大多数の人が嫌いなはず。

ここ、関友高校の学生たちもその大多数に当てはまるのがほとんどだろう。そんな中、模試への意識が周りとは比べ格段に高い学生がいた。

「葵ー、今回こそ1位か？」

竹井が聞く。

「残念、今回も2位！」

返された日南の成績を見ると、順位欄には『2位』の文字。

全ての教科において全国順位、埼玉県内順位、学校順位、クラス順位、全て2位だ。

これは狙って全て2位になったわけではない。

1位を取った学生と同じ埼玉県の同じ学校の同じクラスにいるからだ。

「てことは、リョータが1位か？」

「さすが相棒!!」

誇らしげに言うみみみ。

「なんでみみみが偉そうに言うのw」

「相棒の功績は私の功績でもある！つまり、私たちは——」

「あー、はいはい。それより、この後みんなどこか行かない？」

「こら！無視するな相棒！」

あはは！と笑いながら、みみみは涼太の背中を叩く。

さすが！さすが！と連呼するみみみから逃げるため、涼太は花火のもとへ。

「助けて花火」

「ち、近い！少し離れる！」

急に寄ってきた涼太に驚き、離れるように命令する花火。

「相変わらず冷たいなー。もしかして嫌われてる？」

「そ、そんなことない！これが普通！」

その後、私は帰る！と言って花火は鞆を持って教室を出ていった。

「はあー、楽しかった！次の打ち上げも楽しみだー！」

「そうだね。次のテストも頑張らないとね」

「おお!?!次も葵に勝つ宣言!?!」

「そんなところ。葵も燃えてるし、俺も応えないとね」

「さすが相棒!!頑張ってくれたまえ！」

嬉しそうに背中を叩くみみみ。

テストの打ち上げからの帰り道、2人は家が近いのもあって、帰るのは一緒だ。

「そういうえば、涼太は今週の日曜って暇？」

「予定は特に無いし、たぶん暇。バイトも休みのはず」

「そうなんだ！ならば一緒に出かけようではないか！」

「いいけど、どこ行くの？」

「それは内緒です！」

人差し指を唇にあて、にしし！と笑うみみみ。

彼女は涼太を誘う時、行き先を言わないことの方が多い。

以前、涼太がその理由を尋ねたら「どこに行くか知らない方が楽しみが増すのです！」と返された。

「だと思った。集合時間とかは後でメッセで送って」

「了解しました！」

他愛もない話を続け、涼太がみみみを送ったところで解散となった。

「ただいま……って、あれ？」

帰宅すると、玄関に見慣れない靴が1足あることに涼太は気づく。

誰か来てるんだろうか。と考えながらリビングへ入ると――



「おかえりなさい、涼太。久しぶりにエリちゃん来てるわよ」

「お邪魔してます……」

気まずそうな顔でソファアーに座る——紺野エリカがいた。

「いらつしやい、エリカ」

「お買い物のお帰りに偶然、エリちゃんに会ったの。」

凜もエリちゃんに会いたがってたし、私も久しぶりに話したかったから晩御飯に誘ったのよ」

ということらしい。

ちなみに、凜は涼太の一つ下の妹だ。

中学卒業以来、すっかり疎遠になってしまった幼馴染の2人。

お互いに……とても気まずい。